

【課題 1】

前期の授業で学んだ内容について概要をまとめる。

それぞれの項目について、自分が疑問に思ったことをコメントシートの中から取り上げて考察する。

また、特に関心のある事項について、調べたことなども書く。

—

【課題 1】は、下記の構成で回答する。

1. 前期の授業の内容の概要

- a. 言語類型論・系統言語学 (世界の諸言語とその分類)
- b. 社会言語学 (言語の階層と言語選択)

(言語接触の話題は、【課題 2】で扱うため、【課題 1】では割愛いたします。)

2. 自分が疑問に思ったことを取り上げて考察する

言語間の類似度の算出について考えます。

3. 特に関心のある事項について、調べたことを書く

言語の社会的要因が、言語自体に与える影響について述べます。

1. 前期の授業の内容の概要

前期の授業では、主に下記の三つの話題が扱われた。

以下では、授業でならった概念を中心に、他の書籍も一部参照しつつ整理する。

a. 言語類型論・系統言語学 (世界の諸言語とその分類)

1. 言語の数世界には 6000-7000 の言語があるとされている

2. 言語変種 (variety) : 言語と方言の総称

言語の系統論的分類

- proto-language
- phonological correspondence を根拠に対応を証明する
- cognate vocabulary has regular correspondence

b. 社会言語学 (言語の階層と言語選択)

威信 (prestige) : ある社会において、ある言語変種に与えられるプラスの評価。

威信には下記の 2 種類が存在する。

顕在的威信 (Overt prestige) : 公的な場において「正しい」とされることば遣いに与えられる評価。

- 典型的には「標準語」に与えられる。

潜在的威信 (Covert prestige) : 特定のグループ内部で「正しい」とされることば遣いに与えられる評価。

- 変種には通常低い評価が特定集団の独自性・連帯感を強化する。

一般的に、顕在的威信は標準語化に、潜在的威信は方言維持に寄与する。

参考: トラッドギル『言語と社会』“Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society”

複数の言語が話される社会では、複数の言語変種が存在し、それらが使い分けられている。

- diaglossia(c.ferguson)
- bilingualism
- multilingualism
- polyglossia
- 3.1. 国家の言語選択(language policy)

共通語 (common language)

ある範囲内で、異なる言語変種を話す人々が媒介言語として用いる言語

国際共通語・全国共通語・地域共通語

共通語はしばしば権力機関 (政府・自治体) によって公用語や国語として制度化される。

- **公用語(official language)**: 公的な場で使われる言語を定めだ機能的な
- **国語(national language)**: 国の一体性の象徴としての理念的な性格を有する
- **リンガ・フランカ (lingua franca)**: 当事者のいずれの母語でもない共通語
 - ▶ 元々は近世地中海地域で使われていた混成言語
 - ▶ リンガ・フランカとして提案された言語案から発達した言語
- 母語(mother language): 個人が、生まれて最初に習得する言語変種
- 3.2. 個人の言語選択(code switching)

多言語を使用する個人が、複数の言語を交えて発話すること。

2. 自分が疑問に思ったことを取り上げて考察する

私が疑問に思ったのは「言語・方言」という区別がなぜ必要で、なぜそのような概念が生まれたのか、ということだ。

結論

「言語」とは近代国家・経済活動を成立させるために便宜上必要な社会的な、画一的な言語規範

「方言はある言語変種が「言語」の逸脱した形であることを表すために一般的に必要な用語

3. 特に関心のある事項について、調べたことを書く

私が疑問に思ったのは、社会的要素が言語に与える影響だ。

ここから、社会言語学的要因による言語自体への作用を表す用語とその解説を列挙し、最後にそれらの考察をまとめる。

婉曲語法 (Euphemism): 不快感を与える語や表現を避け、遠回しな表現を用いること。

普及するにつれて、否定的な意味合いが生まれて、さらなる婉曲的な言い換えを生み出していく。

新しい婉曲語法の成立を通して、同じ対象でも複数通りの言い方が生まれるようになる。

つまり、実際に指示されるもの denotation connotation 直接言及することがタブー視されている物事に別の語句・表現を用いること

- 忌まわしいもの (病気・死)
- 不浄なもの (排泄)
- 恐れ多いもの (神)

過剰修正 (overcorrection):

社会的に威信のある言語変種(標準語)との違いを解消すべく、威信のない言語変種の話者が、自身の言語使用を修正しようとした結果、威信のある言語変種を過度に使用したり、規範文法的に誤用とすべき発音や形式を使用したりすること。

参考: W.Labov **規範 (norm)**: 社会のメンバーの行動・その解釈を制御する共有された規則

言語規範 (linguistic norm): 言語を使う上での約束

社会言語規範 (sociolinguistic norm): 場面や相手にとって適切な言語使用だったかを判断するための規則

※接触場面研究において。

接触場面研究: 母語話者と非母語話者の間のコミュニケーション

接触場面における規範: コミュニケーション場面に参加している当事者によって正しい規則

言語問題は規範からの逸脱

接触場面の規範の選択においては母語話者の持つ規範が basic norm になる。

- ただ、それは母語場面における規範ではない
- 母語場面では意識されなかった規範が顕在化する

今回は調べられなかったが、言語自体に影響を与える要素 言語権 (language rights) :

言語行動 (language behavior):

言語使用領域 (domain) :

言語政策 (language policy) :

言語接触 (language contact) :

- 接触言語 (contact language) :

方言 (dialect) 方言接触 (dialect contact) 言語変数 (linguistic variable) :

参与観察 (participant observation) :

スタイル (style) :

ステレオタイプ (stereotype) :

Communication type :

- 精密コード (elaborated code) :

- 限定コード (restricted code) :

変異理論 (variation theory) 伝達能力 (communicative competence) :

【課題 2】

課題図書のうち一冊を読み、内容をまとめ、自分の考えを書く。

選択した課題図書

『ピジン・クレオール諸語の世界』 西江雅之 白水社 (2020)

選択した課題図書(以下: 本書)の構成

本書は、西江雅之(以下: 著者)が残した二つの主要な連載を、一冊の書籍としてまとめたものである。本書も第一部「『出会い』の言語学」と第二部「『ことば』を追って」に分かれており、それぞれの「部」が一つの連載論文に対応している。どちらも基本的に類似した構成を取っているが、扱う内容や文体には、「部」の間で差異が見られる。

どちらの「部」においても、冒頭で「言語とは何か」といった議論が成された後に、言語接触とピジン・クレオール言語についての考察が述べられている。

両「部」の差異は次のとおりだ。まず第一部では、理論に主軸をおいた論説が書かれている。言語接触に関する一般的な理論・概念的枠組みが、具体例を交えつつ説明されている。それに対し第二部では、抽象的な議論が展開されている。エッセイのような文体で、時折言語学以外の領域に関するテーマも扱いつつ、言語の本質に迫る言説が展開されている。

本レポート(以下: 本稿)の目標

言語接触に関する一般的な理論の全体像を掴むこと。

本稿の構成に関する注意事項

上記の目標を達成するため、本稿の構成は、本書の実際の構成と異なっている。

1. 個別具体的な例に関する記述は割愛する。

下記の2つの章は、個別のピジン・クレオール語の具体的な記述であるため本稿では扱わない。

- ・第一部5章「トク・ピシン語」

- ・第一部11章「ハイチ・クレオール語」

2. 本書の第一部・第二部で重複している箇所は同一部分で扱う

—

1. 「言語」という概念の脆弱性・問題 下記の通り、「異なる言語」を論ずる前段階で、既に様々な問題をはらんでいることが分かる。1.1. 「異なる言語」とは何か 一般に「○○語」と呼ばれる言語でも、1.2. 「言語」内部での差異 もし「○○語」という概念が成り立つとすれば、その「○○語」内部には、下記の通り主に2つの変種が生まれる。(i) 地域変種 地域に

よって生まれる、言語内の音声的・語彙的・(稀に)統語的な差異。一般的呼称でいうところの「方言」と一致する。(ii) 状況対応変種 レジストリによって生まれる言語内の差分。日本語や朝鮮語に顕著にみられる「敬語」がこれにあたる。

2. 言語の死と言語の誕生 2.1. 言語の「死」の種類

1. 自然死
2. 突然死
3. 強要死
4. 選択死
5. 複数死
6. 棚上げ死
7. 曖昧死

2.2. 言語の誕生(異言語接触の帰結) まず、筆者は「異言語が出会う」という表現は正確でないと本書の中で指摘している。実際は「異言語の話者どうしが出会い、コミュニケーションが行われる」。そのことを念頭に置いて、下記の通り、異言語接触の帰結の種類を整理する。

- a. 言語学的変化が起こらない 本当に何も起きない場合 non-verbal な言語表現に頼る場合
- b. 言語学的変化が起こる どちらかの言語に合わせる 別の言語を用いる場合 新しい言語を用いる場合

1. 手話が形成される場合
2. 混ざり合う① (部分的)
3. 混ざり合う② (両言語が共に構造がかわってしまう)
3. 混成語

まだ社会的に一般化されていない状態

pidginization の開始

4. ピジン語

> 自分の母語と、ピジン語の二言語使用

“pidgin”の語源について “pidgin” の語源は複数考慮されており、未だ定まっていない。

- ポルトガル語 “baixo(低い)”
- ヘブライ語 “pidjom”(交易・物々交換)
- アラワク語 “pidian”
- 中国語訛りの “ocupacao”

- 中国語訛りの “business”

4.1. ピジン語の起源

相手の言語に合わせず、ピジン語が生まれる理由

- 無能者説
- 幼児語説
- 個別並行発達説
- ヨーロッパの方言起源説
- 航海船上発達説
- 単一起源説
 - 語彙再入れ替え説
- バイオ・プログラム説

4.2. ピジン語の発達段階

- jargon(initial pidgen)
- stable pidgin
- expanded pidgen
- declining pidgen

→多くのピジン語は消滅

5. クレオール語

母語化を遂げたピジン語: クレオール語

5.1. クレオール語のライフサイクル

1. decreolization 2. recreolization

5.2. クレオール語の類型 basilect: lexifier から最も遠い言語として知覚されるクレオール語

acrolect: クレオール語化の後に現れる lexifier に近い・lexifier の方言のようなものになっている

mesolect: basilect と acrolect の間

lexifier(語彙提供言語): あるクレオール語において、その言語由来の語彙が語源となった語が多い言語

クレオール語をめぐる多言語状況(9, 10 章)

筆者は、第一部の 9, 10 章でそれぞれ、社会的視点(マクロ的視点)、話者視点(ミクロ的視点)からクレオール語を取り巻く多言語環境について述べている。

ピジン・クレオール諸語研究(12 章)

研究史

おしなべて、ピジン・クレオール諸語に関する研究は消極的な初期研究と積極的なに二分することができる、と筆者は述べている。初期研究で色濃かったのは、異なる複数の言語が接触すると、そこからそれらの言語が「混ざってしまう」「混乱してしまう」ということに注目するという。そして、多くの場合、その考えは差別的なものであるとしている。その後の研究では、対照的に、ピジン・クレオール語の創出が、人間の新たな可能性として注目され始める。ピジン・クレオール語の形成過程やその使用のあり方に、主体性・創造性・社会的共生性といった人間の能力を見出しているのだという。現代では、「クレオールらしさ」のようなものが研究の話題を占めている。